

## ?氷放言 : 雑録

著者	布衣生
雑誌名	龍南會雜誌
巻	8 0
ページ	5 1 - 5 9
発行年	1900-06-25
その他の言語のタイトル	嚙氷放言 : 雑録
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5589">http://hdl.handle.net/2298/5589</a>

せられ、數々遊ぶ森の中、夜の明けぬるも知らざりき。これぞ我生涯に於て、眞の幸福を齎らし、日になん、其幸たる慘なく悔なく唯純潔高尚もの、願くば今日のこと。明日も來ん年も、否我我送る生涯を、斯くて過さしめよ。其願も單に幽寂の境の默思靜想に止まるのみ。されど苦々み惱む輩は、人の心を煩はし、其自由を害ふとかや、嗚呼我には頻求の此輩ありて、羈絆と繁累を離れ、孤獨たるとはいど稀に、あはれ我は此快樂を享有せむため、孤獨に入らむため、此煩累より脱するの要あり、今日の經歷は、又も斯る快樂に耽らんための先驅ぞかし。(ルイソの旨趣)

## 囓氷放言

布衣生筆記

樂しきは池塘春草の夢さやら申すが、段々に夢が教場内にも結ばれ、御目玉を食ふ次第になつて、折角晝寝の好時期を欠伸に過す様な不經濟な事となる。經濟界不振の今日此頃、勤儉貯蓄の大々的必要である云ふ事は、大藏のをさごの癡言を聞かないでも、分り切つて居る次第であるから僕も近頃は晝寝を節儉して、訪問に時間を費しつゝあるが、此處に掲ぐるのは、城南の其先生が氷を嚙んで快辯を振られたのを筆記したのである。元より心覺えの誤りなどは多からうと思ふが、それは速記でないから恕して貰いたいものだ。僕は文字に拙いのに、殊に下付な談話語のまゝ、記したので、メチャ／＼である。それも御許を乞いたい。而も文字上に對する責には、飽迄僕が任するのてある。

何か話せど、生憎君等の眠氣さましになる様な事がサツパリないんだよ。若い時の失策談やら、失戀談などある事はあるが、それは大臣になつてからの逸事談とて、新聞屋よろこばせにとつて置こう。一体日本は妙な習慣の國で、昔も盜賊したのでも、破倫な事したのでも、高位高官になつて、人爵というものにあり付くと、逸事談とて社會の歡迎を受ける事となる。で今やたらに面白い話をやらかすと、直に君等が攻撃の材料とするので、暫時玉手函の中に仕舞つて置くが、今に親任

官になるから、其の節御披露をする事としやう。豪傑とか、英雄とか、評判のある男のする事は、屁一つすかしても、ばた餅が細からるげ落ちた様に感ずるのは、東西を通じて同一である様である。維新前伊藤さんと木戸さんが、妓樓に上る時金が足りなくなつて、近江の土百姓から、十圓の金をかりて、伊藤が負債者で木戸が證人の證文を、俊介殿直筆でさへ入れてあつたを、此頃伊藤侯が見出し、是非元金十倍で買戻したいとか交渉したそうだが、當人中々聞入れない。これは傳家の寶物として取つて置かなければなりません、とう／＼聞かなかつたと云ふ話があるが、證文一枚がなるとそんなに大切であるか、サツパリ理由が分らん。おんなじ事でグラツトストーンが、靴の裏皮が或停車場でちたのを、驛長先生直様拾ひ上げ、丁寧に管底に藏えて居るとの事である。がこの儘では弊の赴く處有名の人のであらば。癪をすい痔をねふつても快よしとする様な次第にならう。此等は教育家の注目すべき處であらう、英雄崇拜はよろまい、而し崇拜の極は英雄を以て天成とし、凡人は如何にしても企及する事が出来ないと云ふ心地になるのだ。此點に付てはおれは小學校の歴史教授法に大不服を唱るものである、一体日本人は支那文學の感化を受けて、法螺の吹き方が上手である、即ち旌旗天を蔽ふとか、精兵百萬とか、數を知らない文學者であるから、無暗に書き立つる、この具合で、一寸また將軍を形容するにも殆どあらゆる形容詞をひつぱりだす。それで人の腦中に大英雄を書かしむるは、殆どエルローペーの筆づかいに異ならない。これであるから『蓋棺事定る』と言んだ。言はゞおれが死んだと思ひ給へ、君等が追慕の情から頻りに譽立つるであらう様に、一寸とした奴か死ぬと、多くの形容詞をならべて讚し立つる。それで『事定る』と云ふのは『死ぬとよく言はれる』と云ふ事を暗指してゐるのである。早死に馬鹿なまと言ふ諺も、此邊から割り出

またのである。論より證據、先づ漢學者先生たちの碑文を見給え、資性英敏とか、幼而好學とか、天資英邁とか、禮稱のないものは少ないであろう。こういう次第であるから、明治時代以前の歴史傳記或は以後の歴史傳記も殆どあてにならない、少くともその文中から形容詞だけを削除して讀んだら、幾分か事實に近づく事が出來よう。で君等の様な幾分か常識のある人間はさうよるまいが、少しの奴等の中には英雄を買被つて仕方がないのである。幽靈の正体見たり枯尾花とやら云ふが、英雄豪傑の正体も多くは枯尾花同然のものであるうよ。君は神社に參詣する度に、どんな宮が神々しいか、どんなのが神々しくないかと云ふ事を感ずる筈である。で神社を神々しくする爲には、鳥居より神殿迄の間を、無暗に長くえて、兩側に大木を鬱蒼と茂らせて置くのである。すると參詣人はいかに神威赫々たる様な氣持がする。英雄豪傑も少しもこれと違ふ處はない。時代が余程我々と隔つて居るか、又は我が住所より隔つた處に居らねば、有難くないのである。黒木は征清戦争の頃は熊本師團長だったので、少しも勳功がなかつた様な心地がまたが、西なとは仙臺の師團長であつたから、遼東の野に轉戦した功勞が非常にある様に思はれた。一寸した事でも英雄崇拜の原因がどんな處にあるか分るのである。それで來て見ればさ程までなし富士の山、釋迦も孔子もかくやあらん。と云ふ歌の眞理である事が分る。おれも一轉して大學の教授にでもなつて見給へ、君等の心は今迄の僕に對する心とズット違つて、えらい奴の様に感ずるかも知れない。フハ…………。大分話が横道にはいつたが、何だつたけ、今君のいつたのは。ウー南阿戦争が結局に近いたと。よく知つてゐるね、感心く、おれは先日ある生徒にパール河の事を話したら、先生其の河は一体どここの河ですと、反問されたのは流石の僕も閉口またよ。パール河を知らない位なら、南阿問題に注目せな

い事が分る。マーこれは大分よい方であるが、ある法科生徒に方今英獨の關係はどうであるか、佛  
 露の間はどうであるかと、聞かれたのにはほんとに弱つたよ。これで法科生と考へて居るのが片腹  
 いたいのである。こんな傾向があるのは、教育制度の罪にあるかも知れないが、なんでそんなに暇が  
 ないのか、了解に苦しむ處である。これであるから全校の學生殊に法科生が一番氣焰が擧がらない、  
 講座から見渡しても活氣のありそうな奴は中々少ない、講義には頗る傾聽する、殆ど死んで居る様  
 である、或は鼻息のせぬ様に眠て居るかも知れぬ、つまり試験を以て青年を束縛したので點數に營  
 々たる結果、あんなに傾聽する様になつたのでもあろうが。傾聽するのはよろしい、而之其の傾聽  
 たるや、活氣のない傾聽である、而之活氣のない傾聽は、社會に出でよりの成效に逆比例すると  
 云ふ事を知つて居らねばならぬ。千頭清臣が大學の卒業證書を何になるかといつて、引さ裂こうと  
 したのを學友から諫止せられて、ようやくよしたと云ふ様な、活氣ある話は兎ても方今一般學生に  
 は望むべからざる事だ。講座に立つものも活氣がないやうだが、兎角最早個人とまで社會より遇せ  
 らるべき君等が、外國語などより讀まれて濟ま込んで居る、鼻毛の長さにもたまつたものでない。  
 だから髯の手前耻か敷い事を知らずに、子供あつかいされて居るのだ。今少し書物から讀まれず、  
 書物を讀む氣色にならなければならぬ、若し今の儘で人の説のみに傾聽して、勉むる處なくんばだ、  
 終には人の禪で相撲をどらねばならぬ事となる。ツマラナイ事でないか、二十年餘勤學の結果、此  
 のざまは、三十にまで立つなど云ふ支那人の優長も思ひ出だすよ、も少し男らまかれと云ふのがお  
 れの望みだ。ウー又横道にはいつて仕舞つたネー、何だつたけ、ソウく、南阿事件の結局か、ど  
 うせ分り切りて居る哩、飯つてよく考へて見るがイー、ナニ、アフリカは國際公法の行はるべき範

圍であるかど。ソシナ事知らなくつてよく法科生に席を列ねて居らるゝチ、ナニをた教わらない  
ど、ソシナ事言ふから癪にさわるのだ。教わつた事より外知らないから、他人の禪で相撲と云ふ事  
となるのだ。日本の書生は一体無責任だからいらない、箸を右手にもつ事をツイ忘れず、號砲を  
聞きて飯を食ふ、と云ふ様な一を聞て十を知と云ふ才子連で、教わつた事より外は知らないとは済  
ましたものだ。ほんとに案山子よろゑくと云ふ處だよ。而しよろしい。教わつた事のみ知つて居れ  
ば、充分に學校を卒業する事が出来る、だからみんなが氣焰が上がらないんだ。先日食堂で、特待  
生が余まり大人なしいと云ふ話が出た。が何の原因だか研究せられずには済まぬ。無理もないよ、  
學校の總領男子だから、冷飯とはわけちがいてなくては済まぬ。ハマツテ質問をすれば、先生の引  
受けが悪くはないかと心配し、一寸丙一つ取つてもクラスの對面に關する、くよくよする、マ  
リ酒一杯飲んでも体に害があつたと云ふと同じとで、始終大人なまゝして居ないと、特待生の投票  
に落選すると云ふ事になる、文科二年かと覺えて居るよ、たしか特待生がない、ないのも道理であ  
るよ、首席の人は平均點其他點數の上では充分他の特待生の中頃には行くべきであつたが、欠席度  
數が少々多かつたれど、早く寄宿舎を出たので、特待生になれなかつたよ。だから特待生になるに  
は、殆ど木で作つた人形の様に動作まで、器械的に左右に運動せねばならない事となる、吾が体を  
吾が意志で自由に動かす事が出来ない様に、三年も續けて見給へ、碌に動かない痛風症の病人  
の様になるだらう、社會に出て活動が出来ぬのも無理はないものだ、冷飯でも總領の様な風だから、  
總領が死んだ様な風をするのは尤た、……又々横道には入つたネー。知らなけりや一寸説明しよや  
う。學者が國際法の領域を狹隘なる版圖に制限したのも久しいものだよ。今日でもクリューベル、

フタル、ノ井マン、マルテンスと云ふ様な學者は、歐洲人の殖民地たるアメリカ諸州なども行はるゝ中に加へて居りながら、歐洲國際法など唱て居る。そして又奇怪にも回教徒の如きは凡で除外さて、マルテンスの如きは其の著近世國際法要義に於て、堂々と土耳其を除外さて居る、アメリカを加へたり、土耳其を除外したりするならば、歐洲と云ふ二字は安當でないから削除せなければならぬ。マルテンスは土耳其を國際團體に加ふるとの巴里條約を忘れて居るのである。而し此は忘れてよいかも知れない、一体社會あれば此處に法ありてふ金言の眞理なるを知りながら、今更國際團體に加ゆるなんて條約する列國のゆるさ加減するで話者にならないからな、而もマルテンスはこゝう言つて居る、『各國が互に相交通して得た處の社會的公共問題、及び各國が等しく有して居る道徳上並に法律上の觀察は、國際法規の前提となるものであるが、此等は皆始め歐羅巴に於て成立したるもので、世界のあらゆる諸國が此等の問題を共通に之此等の觀察を同ふえたのは、遙に後れた事は分て居る、これは國際關係の歴史が立派に證明する所である、然らば國際法規の行はるゝ所を制限して、歐洲文明の原則を承認し、文明國と稱すべき諸國にのみ行はるゝものなりと云ふ事が至當の言である、』此等は皆始め歐洲に於て成立したるものでなと、は、誠に淺學の致す所である、勿論歐洲人のみが人であると考へて居る世間知らずであるから、致方はないが、此れ位の事は日本支那の歴史を讀んだならば、直に了解される事である、一体法と云ふものは、國家の構成以前に存して居り、且つ社會に於ける諸種の權力の設定せらるゝに先ち存在するものである。尙分る様に言つて見れば、假令社會の組織が整頓せないでも、又は法典が存在して居ないでも、又は巡查が居らないでも、又は裁判所がないにしても、他人の所有物を横領せ、又他人を殺害するは法を犯すものである事は

明かである。司法官又は適當の能力を附與せられた吏員は、法を發布し適用し又は守らざる事は出來る。けれども法は此等吏員の創案にかゝるものではない。抑も社會が野蠻な時代にも、消極的の意義より成つた法が、存在したと云ふ事は疑もない事で、假令其の意味が確定せる意義を有せざりしにせよ、又其の意味が漠然たるものなりしにせよ、何れに關らず先づ法の存在した事は疑ない事である。則ち不文法を成文法として發布また計で、法の法たる所は古今同一であると思ふ。でこう君とたれと相對すれば、各其の人格を敬重せしむる權利を有し、又自由に行動する權利を有して居る事は明白である。かく個人が各々其の人格を主張し得るのは、國家の保護あるに依る、個人に關する眞理は個人の集合體たる國家に對しても亦眞理であるから、國家と稱する集合體も亦個人と全じく權利の主體たるを得るのは明白なる事實である。で國家なるものが成立すると同時に、他の國家に對し各自人格を尊敬せしむるの權利を有し、又各自内で行動し得るは明かである。で人定國際法は別物として、自然國際法が國家の集合體の二箇又は數箇間に行はれざるべからざるは、個人と個人との關係に就て既に説明せし所と毫も異なる處ないではないか。換言すると、世界何れの邦國を問はず必ず自然國際法の行はるべき版圖内にありと云ふ事である。西班牙人がメキシコなどを攻め數多の蠻人を害し、財貨を奪ふたのは、二國間に條約がなかつたから、人定國際法より論する譯には行かぬか知らぬが、自然國際法の原則には飽迄も反して居ると云ふ事が出来る。而し、マルテンスは領事裁判制度があるから、國際法は東洋諸國に行はれぬなど云つて居るが、これは曖昧極る議論で、隣國たる關係により、又は公通の利害、又は永久の關係等より、國際間に補助法則の發生すると云ふ事を棚に上げてゐるより起つた事だ。若し歐洲と支那諸國等の條約が、相互主義にならない



のを以て、直に國際法規の行はるべき範圍でないと斷言するは、淺薄笑ふべき事である。是が則ち公通の利害により、補助法則を規定したもので、これ等も實際を言へば多くは西洋諸國が文明國と自稱しつつも、其の兵力の充實せるをたのみ、暴力を行使せるより起れるもので、國際法規の根本的元則に違背するの多いのである。こんな瑣細な事を云々えて國際法の範圍を制限するは、尙ほ一指を斷つた爲めに人間たらずと云ふと同じ事、笑ふ可き事の極ぢやないか。一体西洋人は實際鼻の高い程自惚れが多く、得手勝手に人種的偏見にかられて立論する事が頗る多い。歴史などにえてもねんなじ事だ。一國民の發達變遷を序するが一國史ならば、萬國史も亦萬國民の發達變遷を序するのであらう。さるを西洋諸國の歴史をのみ叙して、名けて萬國史と云ふのは何のこつだい。そえてそれに理由を附して云ふには、甲乙兩種の國民相接え、我は好を通じ、或は戰を宣したる時を、萬國史の發端とえ、其の世界とする處、年所を経るに従て發達變遷し今日に至る經歷を叙するを以て萬國史の主眼とすると。こゝ屁理屈をつけて居る。然らば東洋と西洋との關係は僅に近頃に至つて始まつたかと云ふに、漢より以來歐洲と支那との交通があつた事は支那史を讀んだものは誰れも知つて居る。唐元等は、歐洲と頗る複雑な關係を生じ、元などは殆ど露の全部を併呑して國を建て居つた事は、人のよく知る處である。又何加利のマガール人種などは歐洲に入るに就て少々も東洋と西洋との關係を惹起せなかつたか。よく東洋歴史を觀察すると、彼等の唱ふる理由に従ふても、東洋史充分萬國史の一部たる必要があると思ふ。それにスウィントン等の腐學者の説に従ふて、我國の學者先生たちも西洋史を以て堂々萬國史とまで口授される。斯學に忠ならざる驚くの外なしである。要するにだ、國際法の行はるべき範圍の様なものも、ブルンチユリーなどの大家が、東洋諸

國も其の範圍にありなといふ事を唱ふるにも關せず、日本學者は、西洋人の禪持が上手であるから、日本支那などは國際法の行はるゝ範圍外にありなと知覺も持たないものが云ひそんな事を喋舌べる。そう／＼思ひ出たよ、池田の政と云ふ狂人チー。あれの方が余程エライと思ふよ、あいつは自分が一番エライと思ふ風で、敢て人の譬などを追はない感心ぢやないか。フハ。ソレ／＼その菓子一つツマミ給へ、余り長話まで退屈だつたチー、濃茶でも飲んで、ユックリとするがよい。近來經濟界紊亂の時代であるから、祿に菓子も出さず、濃い茶も飲ませないが、今日は特別だ。でおれが銀行通帳を見るがイー、段々金高がふえて行くだよ、而し官等計り上がつて、俸給の増さなのが大困りよ。大笑一番。

(完)

## 河畔の逍遙

錨山人

新年の日もまだ淺きある夕、吾れ獨。白水の畔りを逍遙ふとありき。殘日すでに西峯に消へて、十里の廣野四顧蒼茫。畦路に農夫の影絶えては、茅屋に昇る炊煙のさきも、何となく寂みしく。彼方の兵營のあたり、喇叭の聲も收りて、猛き武夫の、佩劍のひらめきも看えず。林樹の影、依稀たる處、一聯の古橋は繪の如く架れど、それを過ぐる小女の姿さへ消え。今や夜の黒幕は、休息と、安慰とを載せて、あらゆる世界を包まむとせり。唯だ、西空に一片の餘月、落ち行く太陽に後れて、凄まじく、淋まじく、また哀れに懸れるのみぞ、吾世を照らす唯一の光なりける。

嗚呼混々洋々、晝夜流れて盡さざるものは長江なりけり。岸頭の漁翁、月を待たずして早くも去